

# 日本人が英語で考えられない原因： 語順の違いと英語音声の特質

清水 英之

## 序文

現在の英語教育の現状を少しでも把握するために、国際コミュニケーション学科で筆者の担当する「英語演習Ⅰ」の受講生37名に自由記述でレポートを書いてもらった。これはけっして調査のための課題ではなく、レポートを書く学習として行なった。課題のテーマは「私と英語」、4つの項目別に自由に意見を記述する方法をとり、筆者が参考にさせてもらった項目は以下の3つである。

- 1 私が受けた英語教育について
- 2 私が英語を学ぶ目的は何か
- 3 大学生のうちどのような英語学習をしたいか

4つ目の項目は「私が将来送りたい人生について」というテーマであるが、この意図する所は、いわゆる「ライフプラン」というキャリア教育のテーマである。

上記の3つの項目を検討した結果、以下のような筆者の疑問に関する情報を得られた。

- 1 英語教育を始めた時期
- 2 1年以上英語圏で暮らした経験がある
- 3 中等教育期間中に1年以上英語圏で留学した経験がある
- 4 英語を学ぶ目的は何か
- 5 大学で勉強したい英語学習は何か
- 6 中学校、高等学校での英語教育の内容と印象

上記の疑問に関する学生の情報から、学生たちが今の時点で重視しているのは主に「コミュニケーション」という言葉で表現されている能力であり、学生たちは「英語で話したい」と強く望んでいることが理解できた。

本論では、「英語で話したい」という学生たちの思いがなぜ実現しにくいのかを議論

する。また、一般的に日本語の母国語話者が英語音声での情報交換を苦手とする根本的理由について考察する。第1章では、上記の学生からの情報を整理し、学生たちが「英語で話したい」という欲求を抱くようになる過程を理解してみたい。第2章では、英語と日本語の語順を比較し日本人が英語で話すことを困難にする原因を明確化してみたい。第3章では、その対策を考え日本の英語教育に提案できる新しい工夫を考えてみたい。

## 第1章 学生たちが受けてきた英語教育の現状

上記で言及した学生のレポートから日本の英語教育の現状が多少なりとも理解できる。序文で言及した六つの項目に関して得られた意見を整理してみたい。

### 1-1 英語教育を始めた時期

2011年の4月から小学校の英語教育は5年生から必修として始められた。やがて2019年には小学校から英語を学習した学生たちが大学に入学してくる。しかし、今の状況でも小学校から英語を学んでいる学生の率は多くなっている。今回のレポートからは37名中23名の学生が小学校から英語を学んでいることが分かった。そればかりか、小学校以前に英語を学び始めた学生が8名もあり、中学校から英語を始めた学生は12名であった。後の1名は留学生である。この結果から現状でもすでに小学校から英語を学び始めた学生が多いことが分かった。

### 1-2 一年以上英語圏で暮らした経験がある

今年度前期の授業で印象に残ったことは、英語の発音が上手な学生がいるということである。今回のレポートから一年以上英語圏で暮らした経験のある学生が4名いることが判明した。さらに、中等教育期間中に一年以上英語圏に留学した経験がある学生が3名いることが分かり、特に高等学校にそうした留学制度をもっている私立高等学校の存在を意識させられた。このように、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」という新学習指導要領の外国語活動の目標はすでに実践され大学の教室にも変化をもたらしていることが現場の教師として感得できた。

### 1-3 英語を学ぶ目的は何か

大学の英語教育は現実としてTOEIC受験指導へと変化している。これは言うまでもないが、英語教育に携わる出版社からTOEICの指導を目的とする教科書が多数出版され、実際に使用されている現実がこの変化を証明している。つまり、大学側が提供している英語教育の目的はTOEIC受験に特化されてきているのである。ここで注意すべきことは、TOEFLではなくTOEICであることだ。TOEFLはアメリカの大学に留学する

条件となる英語試験であるが、TOEICはビジネス社会で活躍するための条件となる英語試験である。また、意見を述べるのは早いかもしれないが、TOEICではlisteningとreading能力が試されspeaking能力は試されない。これは皮肉な現実であるが、TOEICで900点という高得点を挙げててもspeakingが苦手という人がいる。そのことは英検2級を持っていても英語が話せない人が多いのと現象としては同じといえよう。ゆえに大学側が提供する英語教育の目的は学生が求めている目的と一致しないこともありうる。大学側の目的は、率直に言ってしまえば、産業界の要請に応えようとする姿勢から生じているが、しかし残念なことに産業界が欲しい人材は英語を流暢に話す、つまり、speakingのできる社員なのである。

では、今回のレポートを読んで理解できた学生側の目的について触れてみたい。一番多かった理由は「英語を使ってコミュニケーションする」(32名)であった。次に、「企業のグローバル化のため英語が必要」(13名)、さらに「異文化交流のため」(9名)となっている。この結果から見ても、学生たちは「英語を使ってコミュニケーションする」ことを目的としていることが明白になる。それでは、この学生たちの英語を学ぶ目的に大学側の英語教育は対応できているのであろうか、という疑問が生じる。ただTOEICの学習を提供するだけでは学生たちの目的を叶えるには不十分と思えてくる。問題は、speakingにある。

#### 1-4 大学で勉強したい英語学習は何か

大学側が学生の満足度を気にせざるをえない状況になりつつある。学習院女子大学も例外ではない。地方の小規模大学ではもはや学生募集停止に追い込まれる大学が出てきている。学生のニーズに応えることが「満足度」を気にする目的であれば、英語教育も学生のニーズに応える余地は十分ある。今回のレポートから理解できた学生のニーズは「speaking」が最も多く、30名の学生たちが「英語で話す学習をしたい」と要望していることが分かった。他には、「TOEICの学習」(10名)、「listening」(7名)、「discussion」(5名)、「grammar」(4名)、「pronunciation」(4名)、「reading」(3名)、「word」(3名)となっている。このように国際コミュニケーション学科の学生たちがこの大学で学びたい英語学習は「英語で話す」学習であることに集中している。単純な結論ではあるが、学生のニーズに真摯に応えようとするならば学生が英語で話す機会を大幅に増やす改革をすることになる。授業からクラブ活動に至まで「学生が(学生中心の学習という観点から)」英語で話す機会を増やしてあげられるのは教師の配慮以外にないと筆者には思われる。

#### 1-5 中学校、高等学校での英語教育の内容と印象

上記の学生の意見から分かるように学生が望む英語学習はspeaking力アップの学習なのである。しかし、そんな学生たちは過去の英語教育において「英語で話す」学習を行

なつてこなかつたのであろうか。この疑問に関する学生たちの記述をまとめてみると、中学校や高等学校で彼らが受けてきた英語教育の内容が理解できてくる。彼らが中学校の英語教育で学習したと思っている内容は、「文法と単語」(9名)、「リスニングとリーディング」(5)、「日常会話と文法」(5名)という順位になり、speakingは特に記されていない。高校での学習内容になると、「受験勉強」(13名)、「文法と単語」(8名)となり、「実践的でない」、「アウトプットが足りない」などの批判的意見もあった。とくに印象に残った意見は「ALTの授業でも生徒は日本語を話していた」であり、英語で話す学習はなかったとの感想を持たざるをえなかった。英語を話したいのに話す学習ができなかったという学生たちの欲求と不満が大学でspeakingを学習したいという希望と関連していることは明らかといえよう。

この章では、学生からのレポートをまとめ、中等教育と高等教育における英語教育の現状を把握することに努めた。37名という少数人数なので「調査・研究」という名には値しない作業であるが、英語教師が個人的授業改革をするための参考にはなるであろう。しかし、ここで一つの意見を述べておきたい。それは、「日常的なコミュニケーションの英語」と「読書のための英語」は英語史という観点から理解すると種類の違う英語であるという事実である。ブリテン島にはもともと英語という言葉は存在しなかった。アングロ＝サクソン人の渡来する以前には先住民としてのイベリア人やケルト人、後に彼らを支配したローマ人などがおり、彼らはブリテン島でケルト語やラテン語を話していた。英語の元となるアングロ＝サクソン語にしても、後にデーン人の古ノルド語、ノルマン人の古フランス語が融合する結果としてシェークスピア時代に現代英語の基礎ができあがった。このような複雑な民族と言語の歴史を経て英語が存在しているのであるが、主な英語の語源はといえば、それはゲルマン語とラテン語である。ゲルマン語は現代ならばドイツ語や北欧語であるしラテン語は現代ならばイタリア語やフランス語である。イギリスでは一般人はゲルマン人が中心であり、日常会話の英語はゲルマン語(比較的短い単語)が中心である。ところが文化的内容になると(教養が高くなると)ラテン語を語源とする単語(比較的長い単語)が中心となってくる。このことを再認識すれば、中学校で会話中心の英語を学習し、高等学校では読書のための英語を学ぶことは当然といえるであろう。さらに大学では、もっと専門的な読書をするのであるからギリシャ語やラテン語を語源とする難しい単語の学習が必要となる。では、speakingはどのようなだろう。当然これも積み重ねの学習が求められる。中学校で日常会話が楽にできる会話能力を培って欲しいのは大学教員としては当然の思いとなる。そこで躓いていては、大学の教育のための難解な英語講読はできないし、日常会話もできない学生たちを相手にしなければならなくなる。それが今の大学の英語教育の現状なのである。中学校で“How do you do?”、“Nice to meet you.”と学び、大学でもネイティブから“How do you

do?”、“Nice to meet you.”と学ばなければいけないような結果となる。この矛盾を整理し解決することなく国家として英語教育を改善することは不可能だと言いたい。ましてや、合理的な解決策を立てずに、この問題解決を少子化による経営危機と抱き合わせで大学にだけ押しつけてくるとすれば、単に英語教育の失敗で少なからぬ大学が募集停止に追い込まれることになるのではないかと心配するばかりである。

解決策はある。Speakingとは英語を声に出して発音することである。日常会話から読書まで英語を発音して学習すればよいことである。ちょっと声を出す勇気があれば誰でも自己英語教育改革ができる。

## 第2章 英語で話すことの難しさはどこにあるのか

英語と日本語の発音の根本的違いについては、本学紀要の第13号で「日本人の英語はなぜネイティブに通じないか」、第14号で「英語はなぜ日本人には難しいのか：日本語と英語の発音上の根本的違い」と題して考察してきた。さらにこの第15号で筆者が議論したいのは、日英語の文法上の違いを再確認することと、イントネーションの思わぬ働きについてである。この文法上の相違とイントネーションとの関係性を意識化し、英語を声に出して発音する訓練を重ねることにより、日本語話者の誰でもが英語で考える能力を培えることである。

### 2-1 語順の違いを確認する

中学校の英語の授業で必ず説明しなければいけない文法事項に語順の違いがある。“I am a student.”にしる“John plays tennis.”にしる「私」「である」「生徒」、「ジョン」「する」「テニス」という語順であるので日本語で意味を理解しようとすれば、「私」「生徒」「である」、「ジョン」「テニス」「する」と並べ変えなければならない。「私である生徒」とか「ジョンするテニス」と理解せよなどと指導をするのは馬鹿げている。そして、このような、英語を日本語の語順に並べ替えて意味を理解するという学習が、私がかつて中学生であった頃も還暦を迎える現在も変化することなく行なわれている。この現状維持は残念ながら今回の学生のレポートからも再確認できた。もっとも、筆者が時々行なっている翻訳の作業のことを考えれば、英語を分かりやすい日本語に翻訳することは、この作業自体が本質的に英語教育の障害となるわけではない。しかし、漢文の授業と同じように、英語を自文化中心主義という意味で日本語に変換してから意味を理解するという脳内のプロセスは、文化人類学的に言って、他の文化の言語を尊重していることにはならない。そもそも異文化である英語を理解するとは、英語の語順のままで意味を理解することに他ならない。

以下に、例をあげて語順の違いを確認してみたい。

- (1) How do you do?  
「いかに」「か」「あなた」「すごす」
- (2) It's nice to meet you.  
「それ」「です」「すてき」「会う」「あなた」
- (3) I went to London last summer.  
「私」「行った」「に」「ロンドン」「去年の夏」
- (4) Sunshine makes me happy.  
「太陽の光」「する」「私」「幸せ」
- (5) Mary presented me this scarf last Christmas.  
「メアリー」「プレゼントした」「私」「このマフラー」「去年のクリスマス」
- (6) I wondered lonely as a cloud.  
「私」「さまよった」「ひとり」「ように」「雲」
- (7) Shall I compare thee to a summer's day?  
「か」「私」「喩える」「君」「に」「夏の日」
- (8) Fore score and seven years ago our fathers brought forth on this continent a new nation.  
「四」「二十」「と」「七年前」「私たちの父親たち」「もたらした」「に」「この大陸」「新しい国」

上記で確認しただけでも、「形容詞と名詞」の連続以外は嫌というほど語順が違う。日常会話から文学や演説に至るまでこの違いは一貫している。ゆえに、英語で考える能力を身につけるためには、日本語の語順に変換する脳内の思考プロセスが弊害になるだろうという意識を持つことが初めの一步であろう。

## 2-2 膠着語とイントネーション・ランゲージの違い

上記で語順の違いを確認したが、これを如何に克服すればいいのだろうか。ここでは、その可能性について検討したい。

まず、語順の違いについて再確認すると、それは、単語レベルの順番の違いであることが分かる。日本語で考えるためには、これらの単語を最低でも三つの語群にまとめる必要がある。その語群とは、もちろん、「主語句」「動詞句」「副詞句」である。念のために、ここで、「句」とは一つの意味をなす一連の単語群と定義している。日本語では、これらの語群を分けるために必要な文法的要素は助詞である。主語ならば「は」「が」、動詞の目的語ならば「を」、副詞句ならば「へ」「に」「で」などをつけて思考に必要な語群に分ける。試しに上記例文の(3)と(5)に助詞をつけてみよう。

(3) I went to London last summer.

「私」は「行った」「に」「ロンドン」「去年の夏」に

(5) Mary presented me this scarf last Christmas.

「メアリー」は「プレゼントした」「私」に「このマフラー」を「去年のクリスマス」に

結果的に、助詞をつけてもまったく日本語の語順にならないことが確認できただけである。さらに、日本語の語順に整理したいならば、「SVOM」系の言語を「SMOV」系の言語の語順に再編成する必要が生じる。こうした語順の変換作業を再認識すれば、英語を日本語に訳すという日本の英語教育が如何に高度で難解な学習を行なわせてきたかが改めて理解できる。この学習に耐えるだけの能力と忍耐力を英語は日本語に要求してきたと言えなくもない。それでいて、この作業は英語で考える能力を培うためには、不必要な無駄な学習と取って替わらなければならないのではないだろうか。

それでは、英語ではどのような工夫で考えることを可能にしているのだろうか。この点に関しては、本学紀要の第13号「日本人の英語はなぜネイティブに通じないか」の第2章「英語のイントネーションについて」で先に議論している。結論から言えば、下降調のイントネーションをつけて語群を分けている、ということである。先の論では、下降調のイントネーションパターンである、音の高低の変化を「ピーヒャラ」という日本語の音声イメージで表現することを提案した。英語では、主語句、動詞句、副詞句を「ピーヒャラ、ピーヒャラ、ピーヒャラ」と区別することによって思考を可能にしているのである。ゆえに、膠着語のように助詞を必要としないのである。であるなら、私たち日本人も英語で考えるためには、「ピーヒャラ、ピーヒャラ、ピーヒャラ」と音読する訓練を重ねなければいけないのである。授業でやるべきことは、戦前の国語の授業でやってきたように、教室で元気よく暗記するまで何回も読ませること、発音させることなのである。

### 2-3 英語におけるリズムとイントネーションの重要性

英語の語順と日本語の語順の違いは、単語レベルではなく、主語句、動詞句、副詞句の語順で整理すれば、以下のようにかなり単純化される。

英語：主語句 + 動詞句 + 副詞句

日本語：主語句 + 副詞句 + 動詞句

そして、英語は下降調のイントネーションで、日本語は助詞で三つの語群を分ければよい。後は、何度も音読して、実際に「話す」練習を重ねれば脳が記憶して、speaking

能力もlistening能力も向上させることができる。

ところが、疑問という観点からすれば、まだ謎は解けていない。各語群の語順に注目すれば、ここにも語順の違いが存在するからだ。次の例をみてみよう。

英 語：The president of the United States is going to visit Japan next month.

日本語：「大統領」「の」「合衆国」「予定である」「訪問する」「日本」「来月」

上記の例を見てみれば、主語句と動詞句の中でさえ語順が違うことが確認される。この違いは何を意味するのだろうか。どんなことに気づかせてくれるのだろうか。

かつて談話の情報構造に関する文法書を読んだ時に、意外に思ったことがある。英語と日本語の情報構造は語順の違いに表れるという事実であった。情報構造の文法では、情報を旧情報と新情報とに区分し、英語では「旧情報+新情報」という順番に伝えられるというのである。つまり、情動的に重要な表現が後置されるという規則性について気づかせてくれるのである。これが事実だとすれば、それは大変なことになる。上記の英文では、なんと一番最後の“next month”が新情報で最も重要な表現になってしまう。もちろん、旧情報、新情報とは、発話の時点で聞き手が既に知っている情報（旧情報）か、まだ知らない情報（新情報）かに左右される。上記の例文では、大統領が日本を訪問するのは分かっているが、それは「来月」だという情報の伝え方になるということである。それでは、日本語ではどうなのだろうか。

上記の英文を日本語に訳すならば、「合衆国大統領は来月日本を訪問する予定です」となり、「来月」は主語句の直後に配置されている。情報構造という文法の理論に即して考えるなら、「日本を訪問する予定です」のほうが新情報になるのであるが、それでよいのだろうか。動詞句の語順はどうであろうか。“Visit Japan”は「訪問する日本を」という順番であり、やはり語順が逆になっている。この順番の違いを旧情報と新情報の規則性に当てはめようとする、日本語は「新情報+旧情報」と配置され、旧情報+新情報と並ぶ規則性は英語には当てはまるが日本語には当てはまらなくなる。ゆえに、情報構造の文法は英語を理解する場合は極めて重要で無視できないが、日本語には適用できないという結論になってしまう。

しかしながら、情報構造の文法から語順を理解するための何か素晴らしいヒントをもらったように思える。新しい情報は既知の情報より重要性が高いという認識のうちの「より重要性が高い」という観点に絞って語順を分析してみてもどうだろう。“Visit Japan”は“Visit”と“Japan”のどちらがより重要性が高いのであろう。「日本を訪問する」は「日本」と「訪問する」のどちらがより重要性が高いのであろう。このように考えれば、「より重要である」という観点からすれば英語も日本語も答えは一致する可能性が出てくる。例えば、“Japan”と「日本を」がともに重要であるといえる。であるなら、その違い

は何かといえば、英語では重要性の高い単語は「より後に配置され」、日本語では「より前に配置される」と仮定できる。ゆえに、語群の配置の違いも、より重要な情報ほど、英語では後に、日本語では前に配置されると理解することができる。このようにして、英語では「主語句+動詞句+副詞句」と並ぶし、日本語では「主語句+副詞句+動詞句」と並ぶと仮定できるのではないだろうか。しかし、実は、ここからがこの議論の本題になる。

本題の疑問は、「音声上の強調の方法」という問題である。この時点で、ようやく英語のリズムとイントネーションの重要性が話題となる。このリズムとイントネーションの重要性については、拙著『英詩朗読の研究』（1996）と本学紀要第13号で考察してきたが、ここで結論だけ述べてみたい。結論は以下ようになる。

- (1) 英語では意味のある単語の母音にストレス・アクセントをつけて発音し強調する。そのストレス・アクセントの連続がリズムという現象となって聴覚的に感知される。
- (2) 英語では一つの情報単位（語群）を区分するため、その語群の最初のストレス・アクセントにピッチ・アクセント（高い音）を付けて下降調のイントネーションを付加する。

リズムを刻む肉体的動きで重要なことは、腹筋に力を入れながら（腹筋を収縮させながら）ストレス・アクセントを強調する動作である。一方、イントネーションを付加する行為で重要なことは、高い音と低い音の順番が「疑問+解答」という脳内の生理現象を生じさせることである。また、このイントネーションの脳内に生じさせる生理的現象によって「考える」ことを可能にしているのであり、「文法」を生み出していることである。現代の脳科学の成果から仮定すると、思考という現象は、一種のストレス反応であり、ストレスの付加と緩和という現象が脳内で生じているのだろうと推論できる。さらに、仮定すれば、ストレスの付加はノルアドレナリン（神経伝達物質）の分泌、その緩和はセロトニン（神経伝達物質）の分泌が関与しており、言語現象とは自律神経の緊張と緩和という現象だろうと推論できる。しかし、今重要なことは、英語を発音する際は、リズムとイントネーションを付けることが欠かせないということである。

ここまで議論して、ようやく、この節の結論に至ることができる。結論は、実に、簡単なことである。

結 論：「英語では前よりも後に配置された単語の方がより重要である」

ということである。文が、「主語句」「動詞句」「副詞句」と並べば、より重要なのは「副

詞句」である。ゆえに、先に取り上げた英文では、“next month” に力を込める必要があり、日本語の発声のように最後が消え入るような発音では、“Pardon?” と言われてしまう。各語群で見れば、“The president of the United States” では、“president” にはピッチ・アクセントを、“United States” にはストレス・アクセントをしっかりと付けて発音する必要がある。

“is going to visit Japan” では“going” にピッチ・アクセントを、“Japan” にストレス・アクセントを付ける必要がある。“Next month” では“next” にピッチ・アクセントを、“month” にストレス・アクセントを付ける必要があるのである。

以上、この章では、日本人が英語で話し考えることを困難にする原因について考察し、英語のリズムとイントネーションの重要性について長々議論してきた。

### 第3章 英語で考えるようになるための工夫

先の章で検討した内容は、英語と日本語の語順は単語レベルから根本的に逆であるという事実を再確認したということである。この事実から、日本人が英語を理解するためには語順を日本語方式に並べ替えるプロセスの必然性が生じてくるのである。先に述べたように、このプロセスは他の外国語を学習する際も同様で、特に漢文で並べ替えをしなければいけない理由に納得がいく。しかし、このプロセスを学校教育で疑問も持たずに続けて行くことには、もう納得がいかないところまで来ている。特に義務教育のレベルでの継続は国民の税金の無駄使いと批判されてもいたしかたないかもしれない。この章では、このような何か納得のいかない批判に対し、科学的な見地から実行可能な改善案を提示することである。

#### 3-1 語群ごとに発音して表現を覚える

語順がまったく逆の二つの言語を単語レベルで学習することは、その語順の違いを一向に一致させることにならない。問題は、「どのように違いを一致させるか」という発想によって解決できると思われる。「一致」という観点から先の例文を比較してみると、主語句、動詞句、副詞句という語群単位では一致させることができる。以下の例を見てみよう。

The president of the United States/ is going to visit Japan/ next month.  
合衆国大統領／日本を訪問の予定／来月

ゆえに、「合衆国大統領」(The president of the United States)、「日本を訪問の予定」(is

going to visit Japan)、 「来月」 (next month) という句単位で両言語の表現を覚える方がより「実用的」と言えそうである。生徒たちが一生懸命やっているように、一つひとつの単語の意味を理解することが無駄であるか「実用的」であるかは、「各単語の意味を句単位の意味で理解させる」という学習指導でかなり改善できる。もっとも、「おはようございます」 (Good morning) を「よい朝ですね」と覚えるかどうかというような問題もなくはない。

この問題は、例の旧情報と新情報という発想を用いて考察できるかもしれない。重要な情報は英語では後置されるという認識は見逃せない。つまり、“Good morning” の場合も、“morning” が新情報で、ストレス・アクセントを付加されて強調されるからである。しかるに、“good” はどうなるかといえば、ピッチ・アクセントがついて高さで強調される。英語では、たった一語の単語でも「ピッチ・アクセント+ストレス・アクセント」の連続（下降調のイントネーション）になる現象を学習者に意識させ、発音練習する指導をしなければならない。一つの意味をなす語群（名詞句、動詞句、副詞句）にしっかり下降調のイントネーションとリズムをつけて発音させれば日本の英語教育も楽しいほど改善されると信じてやまない。まず、身近なところにいる生徒や学生に試してみたらどうだろう。

### 3-2 イントネーションを付けて一文を読み切る訓練をする

「合衆国大統領は来月日本を訪問する予定です」、この日本文を読む時どこかで息継ぎをするであろうか。それでは、“The president of the United States is going to visit Japan next month” はどうだろう。この英文を息継ぎせず、一気に読んでしまうだろうか。もちろんネイティブ・スピーカーならば一気に読み切るだろう。語順の違いを一致させるという意味では、同じ内容の英文と日本文は一文をともに途中で息継ぎをせず一気に読むことが求められる。ところが、英文をピリオドまで一気に読み切ることは日本語話者には簡単にできることではない。ここでは、二つの点に注意を払い英文を句点まで読み切る指導が必要となる。それは以下の方法である。

- (1) 日本語的カタカナ発音にならないように英語のストレス・アクセントだけを腹筋に力を入れながら一息で読み切る。
- (2) 日本語の「は」「を」といった助詞を意識せず、英語の主語句、動詞句、副詞句の最初のストレス・アクセントにピッチ・アクセントを加えて各語句を区切る意識を持って読む。

上記で (1) を実行すれば、先の英文は “president” “United” “States” “going” “visit” “Japan” “next” “month” のストレス・アクセントだけを腹筋に力を含めてリズムよく発音すればよいので、重要な母音を8回発音すればよいことになる。日本語のようにカ

タカナ的に発音すれば、「プレジデントオヴザ」だけの発音で母音を8回発音するようなことになってしまう。これでは英文の読みの速度に追いつくはずもなく、途中で息切れするのは当たり前と言える。

上記(2)に関して付加するならば、日本語の助詞は発音すると息を吐き切る傾向がないだろうか。「合衆国大統領は」と発音した後、ちょっと息継ぎをして「間」を置く傾向にあるのではないだろうか。日本人が英文を読む時の間(pause)の多さは、竹蓋幸夫著『日本人英語の科学』(研究社, 1982)で科学的に検証されている。筆者の英語教育研究熱もこの研究書により高まったことを感謝の意を込めて記しておきたい。結論的に言えば、日本語の助詞は語句を区切るとともに、息継ぎの機会ともなり、間を生じさせる原因になっているのである。英語教育の指導者は、この「間」の弊害を意識し、学習者に一息で息継ぎをさせずに一文を読み切る練習を授業で行なうべきであろう。

後は、授業中、学習者が英語で話す演習をできるだけ多く準備してあげる必要がある。

### 3-3 会話の訓練をする

会話の訓練は、今回の学生たちの意見からも理解できるように、学生たちが一番望んでいる英語学習である。大学として組織的に対応できることが18歳人口激減に苦しむ大学の存続に影響すると言ったら、「ひとつのご意見として承っておきます」と言われそうである。もし組織的対応ができないとしても、学生個人でも会話の訓練ができるというのがここでの提案である。

会話は一人でもできる。なぜなら人は誰でも言葉を用いて頭の中で会話しているからである。我々はいつも頭の中で考えている。極めて単純な発想であるが、英語で考える時間を設ければよいと言える。“We should think in English.” “I’d better try to think in English.” “Why don’t we think in English?” “I’ll try it, to think in English and I will be able to speak in English. I’ll do it.” こうした練習なら一人でもできる。そして、中学校の生徒たちに勧めたい英会話練習は、まずは、疑問文を発音すること、そして、その疑問に答えることである。

#### (1) What?

What is this in English? This is a pencil.

What is that in English? It’s a cucumber.

What is she? She is a salesclerk. She sells shoes.

What am I doing now? I’m buying a ticket.

#### (2) Where?

Where am I now? I’m at the station.

Where is my key? It’s in my pocket here.

Where is my mother? She may be at home.

Where am I having lunch? At the cafeteria.

(3) When?

When is it now? It's five twelve.

When am I going to meet her? I'm going to meet her at three.

When will she go swimming? She goes swimming on Mondays.

When does the bookstore open? At ten am.

(4) How?

How are you today? I'm fine, thank you. And you?

How do I open this? With the scissors.

How will I go to the station? By bus or on foot? On foot for health today.

How will she get in touch with me? Maybe by e-mail.

(5) Why?

Why am I at the theatre? I'm going to see the cinema.

Why am I happy? I've seen my girlfriend.

Why is this here? My brother left his pass. I'll call him.

Why do I have to study English? I want to live in America someday.

上記のような英語による自分との対話ならいつでも、どこでも可能である。それこそ、ペットに英語で話しかける習慣をつけることも可能である。中学校で学習する英語と自分で学習する英語を合わせれば自分一人でも英会話の練習が可能であることを提案できたのではないだろうか。

以上、この章では、英語で考えられるようにするための工夫を提案してみた。個人でも教室でも友人同士でも英語で話すことは可能であることを強調したい。付け加えるならば、英語で話せるようになりたいという憧れと忍耐強い努力が必要なだけである。

## 結論

本学紀要の第13号で「日本人の英語はなぜネイティブに通じないか」、第14号で「英語はなぜ日本人には難しいのか：日本語と英語の発音上の根本的違い」、そしてこの号で「日本人が英語で考えられない原因：語順の違いと英語音声の特質」と題して、我が国の英語教育の改善のために拙論を書いてきたつもりである。このような考察が可能になった背景には日本人学者の素晴らしい研究成果があることを述べておきたい。ただ筆者は英語教育改善というテーマに絞って、いくつかの研究成果を再編成したにすぎない。学者の研究というのは自己の利益や出世のためにあるのではなく、人々の利益と幸福感

のためにあるのだと信じている。ゆえに、筆者の三つの拙論が英語教育に携わっている先生方や英語学習に励んでいる学習者の役に立つようであれば、この考察も研究であったと確認できるかもしれない。

今回の議論では、特に語順の違いと音声的特質との関係を考察してみた。結論として確認すべきことは、第一に、日本語と英語の語順の違いが我々が英語で考えることを困難にしていることである。第二に、英語のリズムを習得することで英語の思考の速度に追いつけることである。そして、最後に、膠着語の思考形式とは別にイントネーションの思考形式を習得することで、英語での思考が可能になるということである。

以上、日本人の多くが意志さえあれば英語でコミュニケーションができるようになるための方法を提案した。

(本学非常勤講師)